

# 4番目の許婚候補 5

*M a n a m i & A k i b i t o*

---

富樫聖夜

*Seiya Togashi*

*eternity*



エタニティ文庫

## 目次

4 番目の許婚候補いいなすけ 5

書き下ろし番外編 騒動の顛末

305

5

4 番目の許婚候補 5

## 第1話 幸せと不安と

私こと上条かみじょうまなみの土曜日の朝は、お仕置きから始まる——

「つて、ちょっと待ってください！」

私は必死に腕を伸ばして、追ってくるたくましい身体を避けようとした。

こんな休日の始まり方があってたまるか……！

けれど、現に目の前では上司であり恋人でもある仁科にしなまきひと彰人課長が、物憂ものうげな笑みを浮かべて私に手を伸ばしている。正確に言うと、私を捕まえてのしかろうとしているのだ。

「間違えたのは謝りますからっ」

必死に言い募もるものの、あっさり捕まり、彼に組み敷かれてしまった。何も身につけていない自分の下腹部に何か硬いものが当たっていることに気づいて、私は息を呑む。

これって、これって……アレですよね!?

昨夜あんなに何度もイタしたくせに、どうしてこの人、こんなに元気なんだろう……

「いい加減に慣れてもよさそうなのに、どうしてこうも毎回間違えるんだらうね？」

彰人さんは笑顔で私を見下ろしている。でも笑っているからといって、機嫌がいいなどと解釈しちゃいけない。むしろ間違えなく不快に思っている証拠なのだから！

男性の心の機微きびに疎とい私でも、さすがに五ヶ月も付き合っていれば、恋人の機嫌くらい分かるようになってくるというもの。怒った時は怒った顔をしてくれればいいのに、この人は怒れば怒るだけ笑顔になっていくのだ。

そして、今のこの笑顔。私の勘違かたがいでなければ、目の前の人はかなり頭に来ているはずで……

彰人さんの弧を描いた唇が、恐ろしい言葉をつむぐ。

「お仕置きだね、まなみ」

「ひい！」

彰人さんの言う「お仕置き」が何を意味するのかは、下腹部に押しつけられているものが明確に示していた。

やっぱりこの展開か！

「え、遠慮しますっ！」

私はぶんぶんと首を横に振って、彰人さんの腕の中から何とか抜け出そうとした。けれど、覆おいかぶさっている熱い身体はビクともしない。

彰人さんはクスクス笑った。

「ねえ、まなみ。お仕置きされるのが分かっていながら毎回間違えるなんて、本当はこうされたいんだと解釈してしまうよ？」

「ち、違いますっ。つい癖で呼び間違えてしまうだけです！」

……ここまでくれば、私がなぜお仕置きされそうになっているのか、そして彰人さんが何に怒っているのか、お分かりいただけただけなことと思う。

そう。私はさつき寝ほけて彰人さんを「課長」と呼んでしまったのだ。プライベートの時は「彰人」と名前と呼ぶように言われていたのに。もし間違えたら「身体に言い聞かせる」と宣言されていたのに。

そしてお仕置きは、はじめは数回に一度のキスで済んでいたのだけど、身体を重ねるようになってからは、間違えるたびにペナルティをとられている。しかも私が支払うのは、キスなんて軽いものじゃない。思いつきりイヤらしいことをされるのだ。それこそ「身体に言い聞かされて」いるといっても過言ではない。一体どうしてこんなことになってしまったのか……

——そもその始まりは私の母方の親戚である三条家と、彰人さんの実家である佐伯家の間に持ち上がった縁談だった。昔からの約束で、私と従姉妹の舞ちゃん、真綾ちゃん

ん、真央ちゃんのうちの誰かが佐伯家にお嫁に行かなければいけないというのだ。

けれど私は他の三人と違って、お金持ちのお嬢様じゃない。だから最後の——四番目の許婚候補だし、よもや順番が回ってくることはあるまいと高をくくっていた。

ところが就職した会社にたまたま彰人さんがいた。彼は佐伯の御曹司だということを隠して働いていたのだ。そして私はなんと、その部下になってしまった。

彰人さんに許婚候補であることがバレたらまずいと思い、ずっと近づかないようにしていたのに、いろいろあって恋人関係になってしまった。

縁談とは無関係なところから始まった恋だけれど、その縁談と、お互いに素性を秘密にしていることが（といっても私は彼の正体を知っているけど）、事態を複雑にしていた。二人の付き合いが会社には、ひいては三条家や佐伯家の親たちにバレてはマズいのだ。

なぜなら私を含めた三条家のイトコたちも彰人さんも、親たちが勝手に決めた縁談話に納得していないから。もし私たち二人の関係を両家の親たちが知れば、その縁談が成立してしてしまう。これは彰人さんと従兄の透兄さんたちが協力して縁談を白紙に戻した今も、変わっていない。

だから私は今朝みたいに寝ぼけている時や、判断に迷った時には、とりあえず「課長」と呼ぶようにしている。だって、呼んではいけない場面とっさに「彰人さん」と呼んでしまったら、取り返しがつかないもの。

でもそんなことを彰人さんは知らないし、私も説明できない。だから、彼は私がいつまで経っても役職で呼んでしまうことを、不満に思っているのだ。

「傷つくね。付き合い始めて五ヶ月も経つのに、未だに間違えられるとは。君の中ではまだ俺は恋人というより上司なんだね」

「そ、それは……」

違うと言いたいけど言えなくて、私は口ごもる。そんな私を見て、彰人さんはいつこりと不吉な笑みを浮かべた。

「これはやっぱり、身体に言い聞かせないとね」

そう言うなり、彰人さんは片手をすつと下ろし、私の足の付け根に触れる。当然そこにも何もまとっていない。

「やつ、彰人さ、ん、んっ」

思わず、鼻にかかった感じの聲が漏れてしまう。それは甘く、どこか誘うような響きを帯びていた。

とても恥ずかしい。なのに、反応せずにはいられない。

昨夜だってさんざん啫かされて、ぐったりしているはずなのに、私の身体は彰人さんに応えようとす。

「ふあ、や、だめ、実家に……帰らなくちゃ、なのに……あつ、んう、んんっ」

今日の午後は実家に帰る予定になっていた。ただでさえ寝坊して予定時間ギリギリなのに、こんなことを始めてしまったら……

彰人さんはゆつくりと、それでいて官能を煽るように手を動かしながら、耳元で囁き。

「大丈夫。早く終わらせるし、仕度も手伝うよ。君はただ、横になっているだけでいい」

「……ああっ……!」

感じやすくなっている胸を濡れた唇と舌で愛撫されて、痺れるような快感に、私は息を詰める。

「や、あ、あつ」

頭がぼうつとしてきて、なぜさっきまであんなに抵抗していたのかすら思い出せなくなっていた。官能を揺さぶられて、私の頭の中から彰人さん以外のものが消えていく。

「……まなみ。愛してる」

胸から顔を上げた彰人さんが囁く。

「私も、私も、好き……」

私はそう呟きながら目を閉じて、彰人さんの肩に縋りついた。

「うー。彰人さんのバカ。彰人さんの絶倫」

私はベーグルをもぐもぐと咀嚼しながら愚痴る。

結局がつつり「お仕置き」されてしまい、彰人さんと一緒にマンションを出た時には、もうお昼に近い時間になっていた。

ゆっくりしている暇はないため、マンションの近くのベーグル屋でランチを取りながら、目の前に座る彰人さんへ恨み節を炸裂させる。

「何が『横』になっているだけ』ですか。嘘つき！」

交わっている最中、突然身体を引っ張り起こされ、彰人さんの膝の上に座らされた。いわゆる対面座位というやつだ。快感に酔っていた私は拒否することなく、彼に言われるままに身体を動かして……

ああああ！ 思い出すだけで、恥ずかしさのあまり穴を掘って埋まりたくなる……！

おまけに、ただ横になっているだけで良かったはずが、体力をががつ削られてしまい、今の私はボロボロの状態だ。本音を言ってしまうえば、実家に戻らずこのままベッドに直行して、十時間くらい眠りたい。それをしないのは、彰人さんのいるマンションよりも実家の方が身体を休められると、身にしみて分かっているからだった。

「だいたい休日っていうのは、心身を休めるためにあるはずです。なのに休むどころか平日より疲れてしまうなんて、どう考えてもおかしいです！」

彰人さんは私のその愚痴を、笑顔で一蹴した。

「平日より週末がいいと言ったのは、まなみ自身じゃないか」

「……ぐっ」

その通りなので、何も言えませんでした……。チクショー！

ベーグルを食べ終わった後、実家に戻るためにそのまま駅へ向かう。駅は店のすぐ近くだし、わざわざ送ってもらう必要はないと言っただけど、彰人さんは改札まで一緒に行くと言っただけ聞かない。

私自身も何だかんだ言っただけで彰人さんといいたいから、誰かに見られる可能性があると感じながら、つい頷いてしまうのだった。

改札口で、彰人さんは名残惜しそうに、私の頬に触れながら言った。

「じゃあ、まなみ。気をつけて。明日、戻ってくる時にまた迎えに来るから」

「はい。では行ってきますね」

私は素直に頷き、頬に触れる彰人さんの手をきゅっと握った後、彼から離れて改札口に向かった。

改札を通り抜けた後、振り返る。すると、そこにはまだ彰人さんがいて、私をじっと見つめていた。

眼鏡をかけて髪をセットし、スーツを着た彰人さんも格好いい。けれど、眼鏡をかけずに前髪も下ろしている私服姿の彰人さんは、うっとりするほど素敵だった。

美形の従兄弟たちを見慣れている私でもそう思うのだから、周囲の女性たちは、なおさらそう思うに違いない。改札口を行きかう女性たちが振り返ったり、見とれていたたりした。

そんな中、彰人さんは私だけを見つめている。それをこそばゆく感じつつも、とても嬉しかった。思わず手を振ってしまったのは、彼の思いに応えたかったのと……自分で意外だけど、周りの女性たちに、彼がフリーじゃないことを示したいと思ってしまったから。

すると彰人さんが、笑顔で手を振り返してくれる。とたんに女性たちの注目を浴びてしまったけど、なぜか気にならなかった。

彼との別れを惜しんでいたために、私は発車時間ギリギリで電車に乗り込んだ。空いている席に腰を下ろして一息つく。

——三条家と佐伯家の縁談が白紙に戻り、私と彰人さんが本当の恋人同士になったあの日から、三ヶ月近くが経っていた。

あれからというもの、お祖父ちゃんたちから結婚についてとやかく言われることもなく、私も従姉妹たちも、平和な日常を過ごしていた。

……いや、大きく動いたことが一つだけある。

なんと、舞ちゃんと涼が婚約したのだ。

といっても内輪でのことで、公にはしていない。イトコ同士ということもあるけれど、それ以上に涼の年齢のことが少しネックになっているみたい。若すぎる上に、まだ社会経験が少ないということで、時期尚早だと判断されたようだ。

そんなわけで、涼が二十五歳になるまで公式な発表は控え、結婚もお預けになってしまった。

でも、それでも構わないと舞ちゃんと言う。

「あと二年の辛抱ですもの。それに、二人の付き合いはもう隠さなくてもいいし。堂々と傍にいられることが、とても嬉しいの」

幸せそうに笑う舞ちゃんの左手の薬指には、ダイヤモンドの指輪が光っていた。

一方、透兄さんと真綾ちゃんは、今も付き合いを内緒にしているみたい。

真央ちゃんは相変わらず現実の恋愛には興味を示さず、BLの世界に没頭している。

「私の最近のイチオシは、誘い受けよっ」

——などと言いき、イベント通いと同人活動に余念がない。……うん、真央ちゃんはいつでもどんな時でも通常運転だ。

そして私はと言えば、週末の過ごし方が少し変わった。

以前は土曜日の日中を彰人さんと一緒に過ごして、土曜日の夜に実家に帰り、日曜日



にマンションへ戻るといふ生活をしていた。だけど、今は金曜日の夜も彰人さんの部屋で過ごしているのだ。

もちろんそれ以外の平日も、彰人さんの仕事が忙しくなければ、夜はできる限り一緒に過ごす。まあ、主に私が夕飯をおごってもらっているだけなんだけど。

金曜以外の平日は、彰人さんの部屋には行かない。私の部屋の前まで送ってもらうだけ。彰人さんと、その……そういう関係になったばかりの頃は、食事に連れて行ってもらうなら、そのまま彼の部屋に連れ込まれて、服を脱がされるってパターンが多かった。

しかも、彰人さん曰く「禁欲期間が長かった反動」とやらで、一回で終わることはなく……。数回ほど付き合わされた後、意識を失い、彰人さんの部屋で朝を迎えることも少なくなかったのだ。

おまけに朝っぱらから元気な彰人さんに、またいいようにされてしまつて……

今日みたいに土曜日ならまだいいけど、それが平日だったらどうなるか。……そう。当然、仕事に支障をきたすことになった。

だって、朝から疲労と寝不足でヨレヨレ、更に身体中の関節（主に足とか腰とか！）がギシギシ言ってる状態で、まともに仕事なんてできる？

ある日、とうとう耐え切れずに半日休むという事態になった私は、どうにかしなければと心底思った。いや、断りきれずについ応じてしまう自分も悪いだけだね。

その時は課のみんなもまだ生暖かい目で見てくれたけど、私が頻繁に休むようになつたりしたら、絶対に眉を顰めると思う。

そう思った私は、彰人さんに平日の夜はやめて欲しいと訴えたのだ。

『ごめんね』

彼もやりすぎたと思つたらしく、苦笑しながら謝ってくれた。

『仕事に支障をきたさないようにセーブするよ』

そうも言ってくれたけど、はつきり言つて信用できるか！ これまでも「もう一回だけ」とか言つて、結局何回もしたくせに！

仕事に関しては信頼も信用もしているけど、夜のことに関しては絶対に信用しちゃいけないと、私は早々に悟っていた。

だから彼と膝を突き合わせて話し合った結果——いや、正確に言えば土下座せんばかりに頼み込んで、月曜から木曜までは「自重」してもらふことにしたのだ。

その代わり、金曜日の夜は彰人さんの部屋で過ごすことになった。金曜日なら次の日は休日なので、多少無茶しても大丈夫だからって。

——それで万事解決だと思つた。けれど、私は甘かつたのだ。

できる日が少なくなる分、一晚あたりの回数が必然的に多くなることは予想していた。一晚に二回だったのが三回になる程度は仕方ないとも思っていた。

なのに、どうしてそれがいきなり四回に増えるとか、下手をすると朝まで解放してくれないとか、土曜日の真つ昼間からすることになるのでしょいか!?

回数だけじゃない。内容もなんか、濃くなっているような……

ベッドの上で恥ずかしい体位を取らされるってことはまあ、置いておくとしても、リビングのソファの上でとか、台所で立ったままとか、シャワーを浴びている時に急襲されて、お風呂場の中でとか!

……これ、絶対に初心者向きじゃないと思う。

ここに来てようやく、私は今まであれでも彰人さんがかなり手加減していたことを思い知ったのだった。しかも本人が爽やかに、けれどどこか色気のある笑みを浮かべながら言うには、「これでもまだ十分手加減している」らしい。

これでもまだ……。私は絶句した。彼が本気を出したらどうなってしまおうのか、考えただけでも怖い!

いくら男性経験が少なかったり、恋愛や性に関する知識が乏しくたって、これくらいは分かる。彰人さんは普通じゃない。絶対「絶倫」ってやつだ。

真央ちゃんが昔貸してくれたBL本に出てきた、ねちっこい攻キャラがそう言われていたし、同僚の水沢さんたちにそれとなく聞いてみたら、みんなそんなにたくさんしてないって言ってたもの。

もつとも当の彰人さんは「恋人同士なら普通のことだよ」なんて、いけしゃあしゃあと言っていたけど。

恋人いない歴〓年齢で、自他共に認める恋愛音痴の私に、生まれて初めてできた恋人が絶倫だった——って、これが物語ならオイシイかもしれないけど、現実なのだから笑えない。

私はごく普通のソフトなお付き合いを望んでいたんだけどなあ……。いきなりこんな濃いお付き合いになるだなんて、夢にも思わなかった。

とは言うものの、彰人さんに抱かれるのが嫌なわけじゃない。これだけは声を大にして言っておきたいけど、彰人さんとういう関係になったことを、あの時彰人さんの手を取ったことを、後悔したことは一度もない。

……早まったかもとは、何度も思ったけど!

正直に言えば、彰人さんに触れられること自体は好きだ。恥ずかしいことをいっぱいされるし、毎回体力の限界を試されてるけど、抱きしめられるのも、キスされるのも、あの手で愛撫されるのも……。すごく気持ちよくて、幸せな気分になれる。

終わった後、いつくしむように背中を撫でられている時や、夜中にふと目が覚めて、耳もとで聞こえる規則正しい鼓動と彼のぬくもりに気づいた時、泣きたくなるくらい幸せを感じてしまうのだ。

私、いつの間にかこんなに彰人さんのことを好きになっていたんだろうって、自分でも不思議に思う。

けれど、その幸せに影を投げかけているものがあつた。

私はまだ彰人さんに、自分の素性——自分が三条家の親戚で、彰人さんの許婚候補の一人だということを、明かしていないのだ。

幸せだと思ふからこそ、なおさら伝えられなかった。惹かれれば惹かれるほど、好きになれば好きになるほど、不安や恐れが増していく。

彰人さんは私の素性を知っても、変わらず好きでいてくれる？

こんな大事なことをずっと隠していた……うん、騙していたも同然の私を、許してくれる？

その自信はなかった。なぜなら私だって、舞ちゃんと涼が付き合っていたのを教えてもらえなかったことに、あんなに衝撃を受けたのだ。なのに彰人さんは冷静に受け止めてくれるだなんて、どうして言える？

もしこれが彰人さんのために黙っていたのなら、まだよかっただろう。でも私が言わなかったのは、保身のためだ。今も不安だから、怖いからって、口にできないでいる。

こんな私、きつと幻滅されてしまう。

そう思うと、ますます言えなくなる。幸せだと思ふ一方で、罪悪感や不安もどんどん

降り積もっていく。そんな悪循環に陥っていた。

\* \* \*

日曜日の昼近く、私は実家で朝食兼昼食を食べていた。すっかり寝坊して朝食の時間に間に合わなかったから、たった一人で。実は最近はずっとこんな調子だ。

原因は前日の寝不足、つまり彰人さんのせいだ。

初めの頃は小言を言っていたお母さんも、最近は何も言わなくなってしまった。もしかしたら、私の寝坊の原因に気づいているのかもしれない。

自分ではよく分からないけど、同じ部署に所属する水沢さんや川西さんによれば、私は疲れた顔をしてはいるものの、肌はつやつやで、ただの疲労や体調不良とは違うのが明白なのだそうだ。

そう言われた時はちよつと戦慄したけど、理由を根掘り葉掘り聞かれなかっただけマシだろう。その点二人とも空気を讀んでくれて助かっている。

「まなみは何時ごろ家を出るの？」

ご飯を食べ終わった私の前に、ミルクたっぷりのコーヒーを置きながら、お母さんが尋ねてきた。お父さんは今朝早く出かけてしまい、家には二人だけだった。

私は壁掛け時計を見つつ答える。

「うーん、あまり夜遅くになるといけないから、ここを四時くらいには出ようと——」  
 そこまで答えた時だった。

——ピンポン。

玄関のチャイムが来客を告げる。実家のインターホンはマンションのとは違ってモニター付きではないから、誰が訪ねてきたのかは分からない。

「誰かしら？」

「あ、私が見てくるよ」

お母さんは洗い物をしていたので、私が代わりに玄関へ向かった。

「はい」

そう言いつつ玄関の扉を開けた私は、仰天する。

「こんにちは、まなみちゃん」

そこには彰人さんの祖母であり、私のお祖母ちゃんの親友でもあった美代子おばあちゃんが、数人のSPを引き連れて立っていたのだった。

「突然お邪魔してごめんなさいね」

リビングのソファに座った美代子おばあちゃんは、朗らかに笑った。そのすぐ後ろに

は、黒いスーツを着たSPの人たちが控えている。一人は男性で、残りの二人は女性だ。うちみたいな一般家庭のリビングではあり得ないような光景だけど、幸か不幸かすっかり慣れっこになっている。

だってイトコたちを除けば、三条家のみんなもたいてい護衛の人や秘書みたいな人を引き連れてやってくるもの。もちろん親戚だけで話をする時は、彼らには別の部屋で待機してもらっているけれど。

今回も黒服さんたちに台所へ行ってもらってから、美代子おばあちゃんは口を開いた。「来月は沙耶ちゃんさんの誕生日があるでしょう？ でもあいにくその時期に検査入院する予定だから、ちょっと早いけどお祝いを届けにきたの」

そう言って美代子おばあちゃんがテーブルに置いたのは、老舗高級和菓子店の銘が入った箱だった。

実は毎年お母さんの誕生日には、あちこちの親戚筋からこうしてお菓子が届けられる。お父さんによれば、結婚した直後はものすごく高価な装飾品とかも届けられていたらしい。それを、お母さんは「私にはもう必要ないから」と言って片っ端から送り返したそうだ。だけど、お菓子だけはもったいないからと言って手元に残したため、以来お母さんへの贈り物はお菓子ばかりになったというわけ。

お菓子と言ってもお金持ちの人たちが選ぶお菓子だから、それはもうめったに食べら

れない高級なものばかり。ご相伴にあずかる私はホクホクだ。

今回も箱を見た瞬間に私が目を輝かせたのを、美代子おばあちゃんは見逃さなかった。「うふふ。まなみちゃんも食べてちょうだいね。ここの職人に特注して作ってもらったものなの」

老舗高級和菓子店の職人に特注……！

「ありがとう、美代子おばあちゃん！」

私は笑顔でお礼を言いながら、さすがお金持ちはやることが違うと感心していた。まあ三条家の親戚から届くのも、そんな高級お菓子ばかりなんだけだ。

ちなみに、お母さん本人はその辺で売ってる普通のお菓子の方が好きだということは、みんなには内緒だ。

「そういえば、まなみちゃんとは全然会わなかったから、言っただけだね」

お互いの近況を報告し合った後、美代子おばあちゃんが不意に思い出したように言った。

「はい？」

「うちと三条家との縁談が白紙に戻ったことは、聞いたでしょう？」

「う、うん」

私は内心ドキリとしながら頷く。

「このことについては、まなみちゃんにも色々迷惑かけたと思うから、ずっと謝らなきゃと思っていたの」

「そ、そんな。私は別に……」

思わず首を横に振った。この問題にずっと振り回されてきたのは事実だけど、矢面に立つてくれたいた舞ちゃんほどではない。

「それより美代子おばあちゃんの方が、その、ガツカリしたんじゃないかって……」

実は少し心配していたのだ。以前佐伯邸にお邪魔した時、美代子おばあちゃんが縁談に熱心な理由を聞いた。だから、縁談が白紙に戻ってどんなにガツカリしただろうって。けれど、意外にも美代子おばあちゃんは明るく笑ってみせた。

「落胆はしたけど、全然平気よ。とりあえず一つの目的は達成できたのだから」

「え？」

縁談は白紙に戻ったのに……？

私が目を丸くしていると、美代子おばあちゃんとの話を黙って聞いていたお母さんが、ため息まじりに口を挟んだ。

「要するにね、おばさまやお父様たちは、あなたたち……いいえ、彰人君と透君が反発することを見込んだ上で、この縁談を進めていたのよ。まったく結婚しようとしないうちに危機感を与えるために」

「それって……」

その事実を知って驚いたけど、意外というわけじゃなかった。だって前に田中係長が推測していた通りだったから。

……どうやらドンピシャのようですよ、係長！

私は心の中でこそとと眩くらいてから、美代子おばあちゃんを見つめた。美代子おばあちゃんは何も言わず、にこにこ笑っている。つまり、お母さんの言ったことは……田中係長の推測は、正しかったのだ。

「それに、おばさまはもろろん、誰もガツカリしてなんかいないわよ。だって、まだ諦めていないんですもの」

「え!? 諦めていないって……もしかして、縁談を……?」

「やあね、沙耶子ちゃんったら、バラしちゃうなんて」

美代子おばあちゃんは笑顔のまま言った。どうやらこっちもドンピシャらしい。

……そういえば、すっかり忘れていたけれど、縁談が白紙に戻った直後に、透兄さんが懸念してたっけ。まだ完全には終わっていないって。

私は恐る恐る尋ねる。

「縁談は白紙に戻ったんだよね? でも本当はそうじゃないの?」

「いいえ、ちゃんと白紙に戻ったわ、まなみちゃん」

美代子おばあちゃんはそう断言した後、「でもね」と続けた。

「これは彰人さんにも透君にも言ったけど、あの子たちが自分で伴侶はなりよを選ぶための時間と猶予ゆうよを与えただけ。それにもかかわらず以前と状況が変わらなかつたら、私たちはすぐにでも動くつもりよ」

「そ、そんなあ……」

これじゃあ、縁談が白紙に戻る前とまったく変わっていないということになる。ううん、二年間の猶予がなくなつた分、状況はもっと悪くなっているのでは……?」

ああ、透兄さんはこのことを見越していたから、自分と真綾ちゃんの間係を公おおびけにしなかつたんだ。もし縁談話が復活してしまつたら、今度は自分たちが私や真央ちゃんを守る盾になるつもりで……

「舞ちゃんの次は真綾ちゃんが、その……許婚候補になるの?」

そう尋ねる私の顔は多分、曇曇っていたに違ちがいない。美代子おばあちゃんは少し目を見張はつた後、優しく微笑ほほえんだ。

「大丈夫よ、まなみちゃん。舞ちゃんのことと反省したから、あなたたちに無理強じいはしないつもりよ」

それを聞いて、私はホッとすする。けれど次の美代子おばあちゃんの言葉で、安堵あんどの気持ちはずぐに吹っ飛んだ。

「もちろん、眞子ちゃんまこの孫であるあなたたちにお嫁に来て欲しいという思いはまだあるわ。でも、嫌なことを無理に押しつけたくはないの。大丈夫。社交界には他にも彰人さんに釣り合いそうなお嬢さんがいるから」

「……え？」

私の心臓が、やけに大きく音を立てた。

その言葉は美代子おばあちゃんにしてみたら、私を安心させるためのものだったのだろう。でも彰人さんの恋人である私にとっては、ものすごくショッキングな言葉だった。……そうだ。今まで考えたこともなかったけれど、何も彰人さんの結婚相手は私たちじゃなきゃだめってわけではない。

私たちは美代子おばあちゃんの親友である眞子お祖母ちゃんの孫で、三条家なら佐伯家と家柄も釣り合ってちょうどよかったから、許嫁候補に選ばれた。ただそれだけの話で、社交界には彰人さんに相応しい女の人が、まだまだいる……

胸の奥がざわめいた。そんなの嫌だと思っ気持ちと、仕方ないって思っ気持ちが、入り混じっている。

『一応忠告しておく。とっとと正直に話すんだな。無用なトラブルを招く前に』

透兄さんの言葉が脳裏のうりをよぎった。

もしかして透兄さんが言っていた「無用なトラブル」っていうのは、このことを指して

いたのかな……。確かに私と彰人さんが付き合っていることを公表していたら、こんなことにはならなかったはずだもの。

ここで、お母さんがまた口を挟んだ。

「美代子おばさま……。縁談が白紙はきに戻ってから、まだ三ヶ月しか経たっていないのよ」  
どこか呆あはれたような口調だった。

「どうしてそう性急なの？ もっと時間をあげてよ」

「いいえ、沙耶子ちゃん。早く手を打たないと」

美代子おばあちゃんは首を横に振ってから、深いため息をついた。

「私だって、もっと時間をあげるつもりだったわよ。でもね、またあの子が同じことを繰り返そうとしているのであれば、放はなつてはおけないわ」

「同じこと？」

「……彰人さんね、恋人ができたみたい」

美代子おばあちゃんが低い声で告げた言葉に、私はドキッとする。

お母さんが、ちらっと私を見たのが分かった。そのことで、私が彰人さんと付き合っているって、お母さんにはとっくにバレていたのだと悟さとる。

お母さんは美代子おばあちゃんに視線を戻した。

「それはいい傾向なんじゃないの？ 彰人君は結婚について真剣に考えているのかもし

れないわ」

「いいえ」

美代子おばあちゃんはまた首を横に振る。

「どうも、私に紹介する気はないみたいなの」

再び心臓がドクンと鳴った。続いて、わけの分からない胸の痛みに襲われる。

家族に紹介する気はない……。それって、それって……

「本気で結婚を考えているなら、家族に紹介したって構わないはずでしょう？ でも彰人さんは、『今はダメ』としか言わないの。きつと今までと同じよ。縁談を持ってこられたくないから恋人をとつかえひっかえして、時間稼ぎしているに違いないわ」

胃の奥がスーッと冷たくなる。

そうじゃないって言いたいし、思いたいけど……！

どうしよう。頭の中で色々な思いがぐるぐるしていて、ついでに胃の中のものもぐるぐるしてきて、気持ち悪くなってきた。

自分だってまだ結婚なんて考えてなくせに、彰人さんもそうだと知ったとたん、こんなに動揺するなんて。

その時、お母さんが何気なく私の背中に触れた。それは美代子おばあちゃんからは絶対に見えない位置だった。薄手のブラウスを通してぬくもりを感じる。

お母さんは私の背中に手を添えたまま、美代子おばあちゃんに言う。

「紹介しないからって、前と同じとは限らないわ、美代子おばさま。恋人ができたみたいとか、紹介する気がないみたいって言い方をするということは、おばさま自身が彼の口から直接聞いたわけじゃないんでしょう？」

私はハツとして顔を上げる。

美代子おばあちゃんは、ばつが悪そうに肩をすくめた。

「……確かに彰人さんから直接聞いたわけじゃないわ。何しろ、最近佐伯邸にはめつきり顔を出さなくなつて、あれ以来彰人さんに会ったのは一回だけですもの。その時にあの子が言ったのは『付き合っている相手はある。けれど、もう少し時間が欲しい』ってことだけ。紹介する気がないみたいっていうのは、私の推測に過ぎないわ」

その言葉に、気持ちがつつと軽くなるのを感じた。我ながら単純だとは思う。

お母さんは私の背中をポンポンと叩くと、美代子おばあちゃんにっこり笑つてみせた。

「ほらね。恋人を紹介してくれないからって、前と同じことを繰り返していると決めつけるのはよくないわ。彼には彼の考えがあるのだから、もう少し長い目で見てあげて、おばさま。きつと母がここにいたら、同じことを言っていたと思うの」

「眞子ちゃんはよく、『美代子ちゃん、せつかちはよくないわ』って言っていたのね」



美代子おばあちゃんは懐かしそうに目を細める。けれど、その後ぼそと咬いた言葉に、私とお母さんは言葉を失った。

「その眞子ちゃんも、あなたたちの花嫁姿を見ずに逝ってしまった。私にもどのくらい時間が残されているのか分からない……。だから余計に焦ってしまっているのだと、自覚はしているの。でも、待つてあげられる余裕……。そんなにあるのかしら？」

美代子おばあちゃんを玄関先で見送った後、お母さんは私を振り返った。

「まなみ。ちゃんと彼と話し合いなさい」

お母さんが言ってるのは、おそらく素性を打ち明けなさいということだろう。

「そ、そうしようと思っではいるんだけど……」

私は煮え切らない態度を取ってしまった。早く話すべきだと自分でも思う。でも美代子おばあちゃんと話をしたこと、自覚してしまった。ずっと騙っていたせいで彼に嫌われてしまうかも……。ということの他にもう一つ、自分の中にある恐れ of 気持ちを。

彰人さんが私を紹介する気はないみたいだと美代子おばあちゃんが言った時、私は傷ついた。けれど、同時に仕方ないとも思ったのだ。

だって、私は舞ちゃんたちみたいにお嬢様じゃないから。これまで彰人さんが付き合ってきた美人なキャリアウーマンたちとも違うから。

——つまり、彰人さんに相応しい相手じゃないから。

そんなネガティブな思いがどこからきたのか、私はもう知っている。私の中にある、どうしても拭い去れない劣等感が原因だ。

もちろん、彰人さんの気持ちを疑っているわけじゃない。時間稼ぎするために私と付き合っているわけじゃないことも明らかだ。だって彰人さんは私と付き合っていることを公表すれば縁談を壊せたのに、私のためを思ってそれをしなかったのだから。

でも、私はどこか彼のことを信じ切れてない。

——彰人さんが私と付き合っていることを家族に告げないのは、私が自分に相応しい相手じゃないと思っっているからでは？

そんな、うす暗い考えが湧いてくる。

彰人さんも、まだ私に素性を明かしていない。自分が本当は仁科彰人じゃなくて佐伯彰人であること、佐伯家の御曹司であることを、明かしていないのだ。

つまり私たちは、お互い秘密を抱えたまま付き合っている。

私はそんなことを、お母さんにつつかえつつかえ語った。

すると、お母さんは苦笑した。

「普通なら、黙っているのは向こうも同じと開き直ってもいいのに……。そうしないところがまなみの長所だとお母さんは思うわ」

「……そんな風に開き直るなんて、できないよ」

私はソファの上でクツションを抱きしめ、そこに顔を埋める。どちらの非が多いかと問われれば、それは間違いない私だ。私の方が何倍も罪深い。なぜなら彰人さんは私の素性を知らない。でも私はとくに彰人さんの素性を知っている。それなのに、素知らぬ顔で恋人付き合いをしているのだから。

きつとこのことを知ったら、彰人さんは私に幻滅する。だって私自身、こんな自分を擁護できないもの。

「でもね。ずっとこのままでいるわけにはいかないでしょう？」

「……うん」

私はクツションに顔を押しつけた状態で頷いた。

このままでいいわけがない。このままでいられるはずもない。隠していても、いつか必ず素性は知られてしまうだろう。

「人に何かを隠されていたとか、騙されていたとか知るの辛いことよ。特にそれを本人ではなくて、別の人から知らされるのはね。だからまなみ」

お母さんは私の頭をポンポンと優しく叩いた。

「手遅れになる前に、腹をくくって彼と話し合いなさい」

「……ん」

「あまり余裕はないかもしれないわ。美代子おばさまはせっかちだから、今度は何をやり出すことか……」

「……うん」

私は何度も頷きつつも、逃げ出したくなるような恐れを感じていた。

マンションに帰るために実家を出て、駅へ向かう。そして電車に揺られながら、私はどうやって切り出そう、どうやって説明しようかと、ぐるぐる考えていた。

でも――

「まなみ」

改札口まで迎えに来てくれた彰人さんの顔を見たとき、素性を明かさなければ」という思いがボンと飛んで行ってしまふのを感じた。

代わりに湧いてきたのは、疼くような胸の痛みと、喜びと、愛おしさ。

足早に改札を抜けて、彰人さんのもとへ急ぐ。

「お帰り、まなみ」

「彰人さん……」

笑顔で迎えられ、自分も笑顔を返しながら、私はまたしても逃げることを選択する。

「ただいま、彰人さん」

——もう少し、このままでいさせて。  
 ——神様お願い、あと少しだけ。

けれど、神様には私のずるくて弱い心が伝わったのかもしれない。  
 私はすぐに、このツケを払うことになったのだ。

## 第2話 知る時、知られる時

完全に油断していたのだと思う。私も、彰人さんも、そして透兄さんたちですら。  
 まさかこんなに早く事態が動くとは、誰一人予想していなかった。だからこそ、彼の動向を把握することができなかったのだ。

——それが起こったのは、美代子おばあちゃんが訪ねてきた日の五日後の、金曜日のことだった。

一週間後にはお盆休みに入るので、私は企業調査チームの仕事と秘書業務の両方で多忙を極めていた。

お盆休みは一週間。その間、会社は公的には休みになるものの、私が所属する事業本部が抱えているプロジェクトの進捗次第では休み中も働かなくてはならない。

そのプロジェクトに必要な資料の取りまとめや出張の手配、会議室の予約とやるべきことがいっぱい、ようやく一息つけたのは午後三時を過ぎた頃だった。

マグカップを手に給湯室へ向かい、普段は入れないお砂糖たっぷりのカフェオレを作

る。いつもだったら部署に戻って自分の席で飲むのだけれど、しばらくパソコンの画面を見たくない気分だった私は、給湯室で立ったままカフェオレをすすった。

一口飲んで、ふうと深い息を吐く。

どうなることかと思っただけで、何とか今日の分の仕事を終わらせるめどがついた。

急な仕事が入らない限り、残業は最小限に抑えられるだろう。私も、彰人さんも。

私は彰人さんの、この後の予定を思い浮かべる。

確か、これから社内会議が一本入っているはずだ。といっても、彰人さんがやるべきことはない。プロジェクトの責任者である金田主任が、関連部署の責任者たちに色々説明する。彰人さんはそれに付き添い、見届けるだけだ。

秘書業務を任されている私も、会議前に人数分のお茶を用意して、最後に後片付けをするだけ。会議に必要な資料は他の女性社員が作成し、配布も彼女が行うため、私がやるべきことはなかった。

だからお茶を会議室に届けた後、会議が終わるまでの間は、彰人さんから頼まれていた稟議書を作成してしまおう。そう思いつつマグカップを手に給湯室を出て、すぐのこどだった。

彰人さんが携帯電話を耳に当てて何事か話しながら、部署のガラス戸を開けて出てきたのだ。彼は私に気づいて、眼鏡の奥の目を瞬かせた。けれど、すぐに目を逸らし、会

話の方に集中する。

「突然すぎますよ」

その声も顔も妙に真剣で、何だか深刻そうに見えた。

仕事のことで何かあったのかな？

私は気にしつつも、彰人さんの横を通りすぎて部署へ向かう。心配だったけれど、立ち聞きするわけにはいかなかった。だってわざわざ廊下に出てきたということは、他の人に聞かれたくない話なのだろうから。

けれど、ガラス戸の取っ手に手をかけた時、ふとあることに思い至った。

さっき彰人さんが耳に当てていた携帯電話は会社から支給されているものではなく、プライベート用のものだった。

思わず振り返った私の目に、携帯を耳に当てたまま苦々しい表情を浮かべる彰人さんの姿が映る。

会社でもプライベートでも、めったにしないほど険しい表情だった。驚く私の耳に、表情と同じように苦々しい彰人さんの声が聞こえてくる。

「いい加減にしてください。今は仕事ですよ。あなた方のおふざけに付き合っている暇はないんです！」

彰人さんは苛立たしげに通話を切ると、びっくりして固まっている私に声をかけた。

「……ああ、驚かせてすまない」  
 気持ちを落ち着かせるためか、深い息を数回吐いてから、こちらに歩いてくる。  
 「何かあったんですか……?」

彼はガラス戸を押し開け私を先に通しながら、小さい声で答えた。  
 「親戚から電話がきたけど、たいした用件じゃなかった」  
 「そう、ですか……」

でも彰人さんの様子から、たいした用じゃなかったように思えなかった。私は妙な不安に襲われて彰人さんを見上げる。

目が合うと彼は、ふっと表情を緩めた。

「年寄りだから、いちいち大げさなんだ。こっちは仕事申中だというのに、お構いなしだからね。困ったものだ」

年寄りって……それって、美代子おばあちゃんのこと?

三条家と違って、佐伯家の親類は多くない。彰人さんの祖父である孝彰おじいちゃんは、戦争で家族の大半を亡くしてしまったからだ。そして今現在、佐伯家の親類でお年寄りと呼べるのは、美代子おばあちゃんしかいない。

美代子おばあちゃんが、仕事中に連絡を……??

確かに人のことはお構いなしといった感じのところはあるけれど、ちゃんとTPOを

弁<sup>わきま</sup>える人だ。なのに、仕事申中と分かっている時間帯に、わざわざ電話をかけてくるなんて……

「心配はいらない。仕事が終わった後にでも、こっちから連絡入れとくよ」

「はい……」

そう言いながらも、私は何か嫌な予感がしていた。

仕事に戻った私は、ひとまず目の前のことに集中した。メールをチェックしたり、プリントアウトした資料をキャビネットに保管したりしているうちに、胸騒ぎを覚えたこともすつかり忘れていた。

彰人さんもいつものように、テキパキと仕事を片付けている。

そんな時に、一本の電話がかかってきた。

外線とは呼び出し音が違うので、外線であることがすぐに分かる。秘書業務をやっている習い性か、とっさに受話器を取っていた。

「はい。新事業推進統括本部の上条です」

『秘書課の日向<sup>ひなた</sup>です。仁科課長はご在席でしょうか?』

受話器からは、きびきびとした女性の声が聞こえた。

「はい。今代わりますので少々お待ちください」

私は保留ボタンを押して受話器を置いてから、課長席で資料をめくっていた彰人さんに声をかける。

「仁科課長、内線一番に秘書課の日向さんからお電話が入っています」

「秘書課の日向さん……？」

顔を上げた彰人さんは、怪訝そうに眉を蹙めた。不思議に思うのも無理はない。うちの部署が秘書課と関わることはめったにないからだ。

——秘書課の日向さん。直接話をしたことはないけれど、その名前と役職、それに顔も知っていた。

彼女は秘書課の課長代行で、あまり頼りにならないと噂される男性の課長に代わり、秘書課の女性社員たちを束ねている。歳は、多分三十歳くらいだと思う。

二十代のうちに結婚退職する人が多い秘書課に長く在籍しているため、一部の人たちにはお局だの何だの言われているらしい。けど、本人はそんな言葉が似合わないきりつとした美人で、キャリアウーマン風の容姿をしている。実際、仕事でもかなり有能だと聞く。

今は後進に道を譲っているけれど、社長——当時は副社長だった——の秘書を長く続けていたことから、それは明らかだった。

役員付きの専属秘書には、秘書課の中でもほんの一握りの人しかなれないらしい。優

れた容姿や秘書としての能力だけでなく、どんな事態にも対応できる機転や冷静さも要求されるからだ。

そのため、役員専属になるというのは、秘書課の中では最高のステータスなのだとか。それをあっさり人に譲ってしまったことから、並の女性じゃないことは確かだ。

その秘書課の日向さんから、直々に連絡が……？

私は忘れかけていた不安が戻ってくるのを感じた。

彰人さんが受話器を取って、内線ボタンを押す。

「代わりました。仁科です。……ええ、それは承知してますが……」

彰人さんの表情が、どんどん苦々しいものになる。私だけでなく、周りの同僚たちも仕事の手を止め、不安そうな顔で彼を見ていた。

「しかし、今は就業中で……。ええ、ですが……」

彰人さんの表情が次第に険しくなっていく。相当難しいやり取りが行われているようだった。

「何か面倒なことが起こってるみたいね」

隣の席の水沢さんが、誰に言うともなしに呟いた。

実は新規事業の計画や準備をしている我が部にとって、秘書課からの連絡というのはとても重大な問題になりかねない危険を孕んでいる。最近はないけれど、重役の鶴の一

声で計画していた事業が白紙に戻ったり、大幅に計画を変更せざるを得なかったことが、過去に何度かあったのだ。

そういった連絡は部長を通して私たちに伝えられるんだけど、その部長は今、出張で留守にしている。だから、課長である彰人さんに連絡が入ってもおかしくない。秘書経験が豊富な日向さんは、その繋ぎ役として電話をかけてきたのかも。

そうでないとしても、どんどん洪い表情になっていく彼を見る限り、決して良いニュースでないことは明らかだった。

「ですが、今は……。ええ、はい。分かりました。……社長がそう仰るならば」  
その言葉に私たちは仰天して、顔を見合わせる。

社長!? 電話の相手は社長なの!?

「……はい。ではすぐに伺います」

最後にため息まじりで答えると、彰人さんは静かに受話器を置いた。それから顔を上げた彼は、私たちが固唾を呑んで見守っているのに気づき、ふっと表情を緩めた。

「大丈夫だ。今やっているプロジェクトとは別件の話だから、安心していい」

その言葉に、部署のみんながホッと安堵の息を漏らした。

「ただ少し社長に用があるから、しばらく席を外す。上条さん」

「は、はいっ」

突然名前を呼ばれた私は慌てて姿勢を止した。

「すまないが、この後の俺の予定は全てキャンセルしてくれ。確か社内会議と書類のチェックだけだったはずだ」

「はい」

そう答えながら、私はマウスを操作してパソコンの画面上で彰人さんの——ううん、「仁科課長」の予定表を開いていた。

うちの課では社内システムを使って社員のスケジュールを管理していて、誰でも閲覧できるようにになっていた。各々別のプロジェクトを抱えているため、同じプロジェクトのメンバーでない限り、相手の予定どころか現在の居場所すら把握するのが難しいからだ。

特に管理職は分刻みの予定になることもしばしばなので、このスケジュール表がなければ、会議の予定などが立てにくい。

「金田。俺がついてなくても大丈夫だな?」

彰人さんは社内会議に一緒に出る予定だった金田さんに声をかける。

「は、はい」

金田さんは椅子から立ち上がりながらそう答えたものの、少し不安げだ。

今回の会議では金田さんがプロジェクトの進捗状況を、関連部署の担当者や責任者に説明する予定になっている。社内の人たちを相手にしたものだからそんなに気負わなくていいはず。だけど、彼がプロジェクトの責任者になったのは今回が初めてなので、不安になるのも無理はないと思う。

多分、会議で何かあったら、彰人さんのフォロワーが入るのを期待してたんじゃないかな。それを見越していたのか、彰人さんは苦笑する。

「心配するな。会議には田中係長に出てもらおうから」

「へいへい」

田中係長も自分が代理になることを予想していたのだろう。軽い口調で返事すると、椅子から立ち上がった。

「プロジェクトの概要は知っている。今日の発表の要点と他に押さえておくべきことを教えてくれりゃあ、後はやっておくよ」

「すまない」

彰人さんが田中係長に言った。

私は今度は田中係長の予定表を開いて、彼のスケジュールを確認する。

……うん、大丈夫。係長には他の会議の予定も、他部署に向かう用事もない。

「課長。課長に代わって係長が会議に出る旨、他の出席者に連絡しておきますね」

私は会議の出席者を確認しながら、彰人さんに声をかけた。

「すまない、頼む」

彰人さんは私に向かって小さく微笑んだ後、田中係長とすり合わせをするためか、書類を手にフロアの端へ向かう。そこは事務机とパイプ椅子がポツンと置かれていて、簡単な打ち合わせなどに使っている場所だ。

私は二人がパーテーションの向こうへ消えていくのを、不安な気持ちで見送った。すり合わせ程度なら課長の机でもできるはずなのに、あえて誰にも聞かれない場所で話し合おうとしている。

社長からの電話はプロジェクトの話じゃなかった。……じゃあ、一体何？

「上条ちゃん？」

水沢さんから怪訝そうに呼びかけられ、私はハッとする。

「あ、何でもありません！ 電話しますね」

私は雑念を追い払い、受話器に手を伸ばした。

そう。会議まであまり時間がない。今は目の前の仕事を片付けないと。

内線番号を押した後、深呼吸をして気持ちを落ち着かせながら、私は電話の相手が出るのを待った。



社長室に向かう彰人さんを見送り、それから会議に向かう金田さんや田中係長たちも見送った後、私はふうつと大きく息を吐いた。

「お疲れ様、上条ちゃん」

川西さんがやってきて、私の机にスポーツ飲料のペットボトルを置く。

「方々に連絡しまくって、喉渴のどかわいたでしょう？ 奢おごってあげる」

言われたとたんに喉の渴さを自覚した私は、川西さんの厚意に甘えることにした。

「すみません。いただきます」

キャップを外して一口飲んだらやけに美味おいしく感じて、私はごくごく喉を鳴らしながら飲み下していく。

やがてペットボトルから口を離し、ほう……と満足げに息をついていたら、川西さんがクスクス笑った。

「美味しそうに飲むよね、上条ちゃんて」

「え？ そ、そうですか？」

実は同じようなことを彰人さんからもよく言われていたりする。私は美味しそうに食べたり飲んだりするから、奢り甲斐ががあるんだって。

どうやら彰人さんの歴代の恋人たちはスタイルを気にして、少ししか食べなかつたらしい。だから、毎回出てきたものを残さず食べる私を見ると、彰人さんは嬉しくなるの

だそうだ。

だってもつたいないし、残したら作った人に失礼じゃない？

私はそう思うのだけど、食事を残す女性たちと付き合ってきた彰人さんは私と出会うまで、それが当たり前だと思っていたんだとか。

それを聞いた時は、庶民丸出しの自分が恥かたじけずかしかつた。けれど、今はそんな女性とばかり付き合ってきた彰人さんを心配する美代子おばあちゃんの気持ちきもちが、ほんの少しだけ分かる。

なぜなら付き合ってきた女性のタイプが、あまりにも偏かたよっているから。あんなにモテるのに、いつも同じようなタイプの人ばかり選んできたのには、作爲的なものを感じる。彰人さんは彼女たちに対して好意は持っていたかもしれないけど、特別に好きなのじゃなかったというのだから、なおさらだ。

それを誰よりもよく知っている美代子おばあちゃんだからこそ、余計に心配しているのだろう。

そして、その美代子おばあちゃんは彰人さんが変わったことを、まだ知らない――

「ねえ、上条ちゃん」

川西さんは急に声のボリュームを落として私に尋ねてきた。

「さつき会議に行く直前、係長が上条ちゃんに、何か言っていたわよね？ あれは何て

言つてたの?」

そう。実は田中係長がさつき通りすがりに私の椅子の真横で足を止め、こそっと声をかけていったのだ。係長と付き合っている川西さんは、それに目ざとく気づいたようだった。

「それが……」

私は係長の言葉を思い出し、戸惑いながら答える。

「時間切れだつて。だから、覚悟を決めておけて……」

最初は仕事のことかと思つた。係長に頼まれていた仕事があつたのに、私がそれをすっかり忘れてしまつていたのかと。でもいくら記憶をたどつても思い当たることはなくて、係長が何のことを言つていたのかさっぱり分からないのだ。

「時間切れねえ……。何か当てはまること、あつたかしら?」

川西さんが首を傾げる。この人にも心当たりがないということとは、企業調査チームの仕事とは関係ないようだ。だとすれば、秘書業務の方……?

その時、川西さんが「あ」と言つた。何かに気づいたらしい。

「……一つだけ心当たりがあるわ。というか、これしか考えられない」

「え? 何ですか?」

川西さんはキョロキョロと周囲を見回し、隣の席の水沢さんがちよどお手洗いに

## 立ち読みサンプル はここまで

行っていることと、誰も私たちに注目していないことを確認すると、かろうじて聞こえるくらいすこやかの小さな声で囁いた。

「上条ちゃんの素性すしょうのことよ。まだ言えてないんでしよう?」

「あ……」

私は目を見開く。

田中係長と川西さんも、なるべく早く彰人さんに素性を打ち明けた方がいいと忠告してくれていたのだ。なのに私が怖がつて、今までずるずると先延ばしのちのちにしている……

——それが、時間切れになつた?

私はヒヤリとする。

「もしかしたら課長の実家の方で、何か動きがあつたんじゃないの? それを知つて、まさし雅史——係長はそんなことを言つたんじゃないかしら」

「佐伯家で何か動きが……?」

先日の美代子おばあちゃんの話の思い出す。さつき廊下で誰かと電話していた彰人さん。やつぱり、相手は美代子おばあちゃんだつたの?

その時とつさに思い浮かんだのは、業ごうを煮やした美代子おばあちゃんが、三条家とは関係ない女性を新たな許婚候補いひよかけに選んで、彰人さんに押しつけようとしているのは……という考えだつた。